

南園會報

第壹號

開

校

記

念

山阿縣武郡立實科高等女學校



山口縣阿武郡立
實科高等女學校

南園會報 第一號 開校記念

目次

● 口 繪

講 堂

南園館(舊南園
御殿書院)

本館前頌德碑

寄宿舎

運動園

農 園

● 發 行 の 辭

米原會長

● 本 校 記 事

(會報部理事)

第一 本校の設置

第二 本校の工事

第三 本校の成立

第四 本校の訓育

● 本 會 記 事

(會 報 部)

第一 本會の成立

第二 本會の事業

第三 本會の經濟

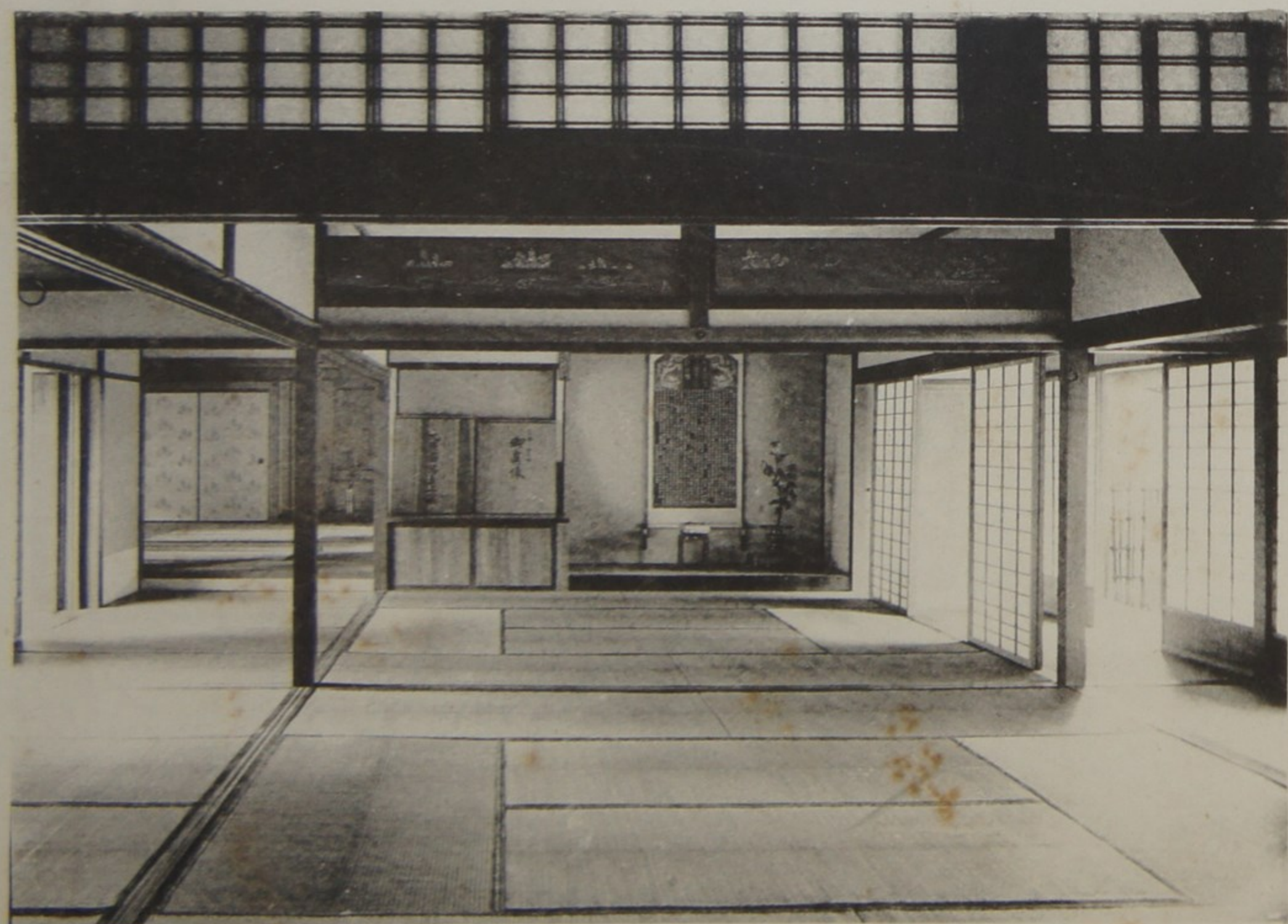
● 現 在 の 會 員

● 本 校 敷 地 圖

以上



講堂



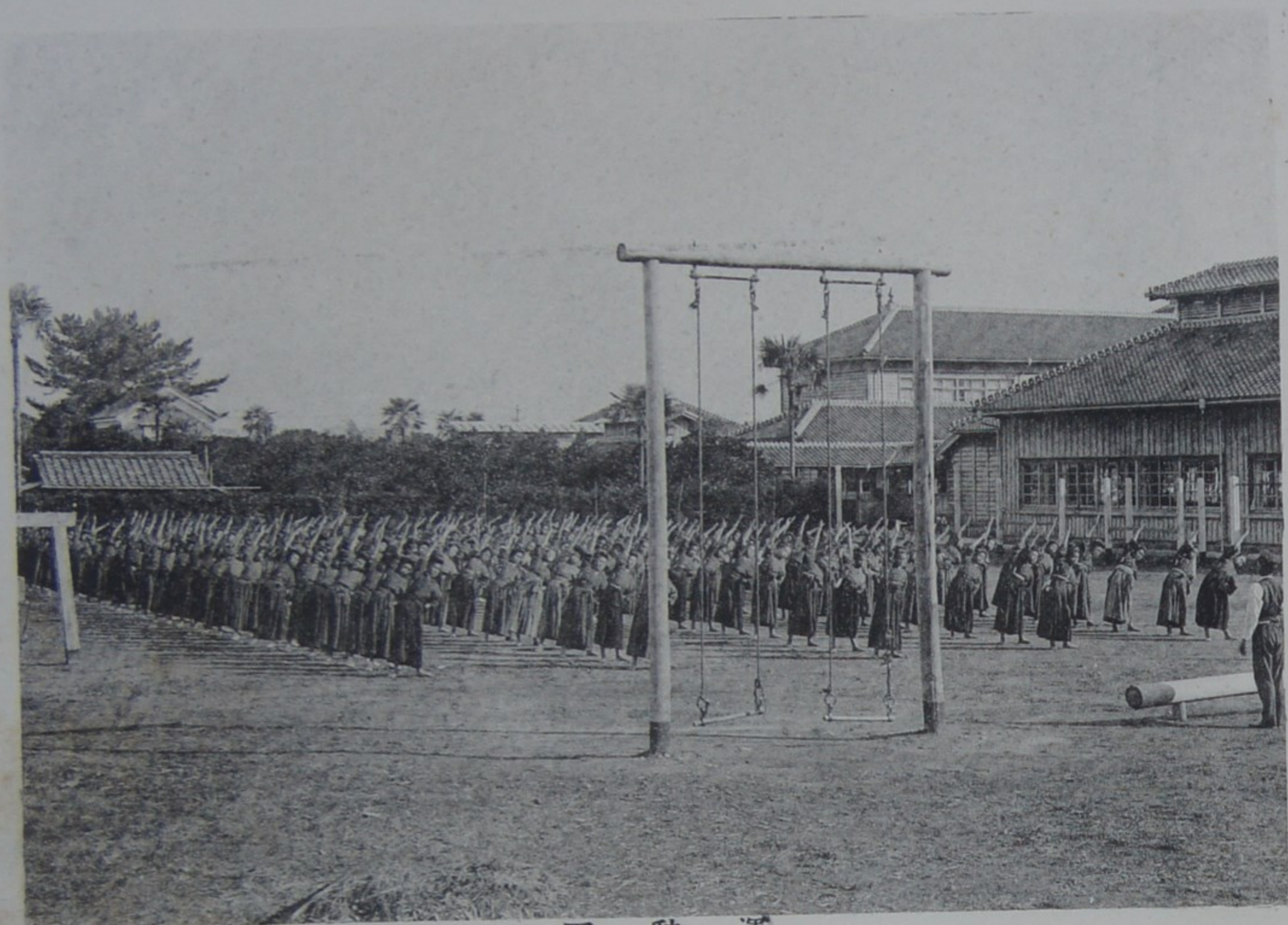
南園館 (旧南園御殿書院)



木館前庭



密宿舎



運動園



農園

山口縣阿武郡立
實科高等女學校

南園會報

第壹號

開校記念

發行の辭

米 原 會 長

我が國運時勢の要求も、本郡積年の期待もは、當局及び先輩有志の奮起を促し
縣下女子高等普通教育の學校中、特に實科を標榜して、設立せられたるものは
實に我が阿武郡立實科高等女學校にあらずや。設置の期待及び其の方法、既に
尋常一様にあらず、其の活動に關し、又其の發展に就て、世の屬望も同情もを
負へるもの、宜ならずこそせんや。職を此の校に奉ずる者、又笈を負ひて此處に
集へる者、徒に教科授受を以て、能事了れりとなすべきにあらず。宜しく品性
に於て、知識に於て、技能に於て、將た健康に於て、眞に確實優良なる婦人を、
此の校門より出ださざるべからざるなり。

見よ、現時社會の傾向は、憂慮すべき現象漸く多きを加ふ。吾人此の間に立ち
て、此等の潮流を排し、卓然として生命ある徳風を作興し、それが實行を鼓舞し
銳意家國に盡す所あらざるべからず。嗚呼、此の理想の實現に努め、以てそが
企畫を大成せむには、校友の提擲誘掖の方法に關し、施設經營するの必要固よ
りこれあり。爰に於てか、校内に於ては、曩に我が校地の歴史的由緒に因める

名稱にて南園會は生れ出でぬ。而して校友諸子の協力に加ふるに、久原家一族及び先輩篤志各位よりの、多大なる援助を蒙るに至り、此の會の計畫せる實施漸く其の歩武を進め、以て校運に貢献する處あり。

顧ふに、一たび學窓を共にし、螢雪を同うせしもの、長へに切磋琢磨して、向上の進路を辿らむことは、吾人の頗る熱望する所なり。さはいへ、一旦業卒へて校門を出づれば、會集の機漸く少く、相互の動靜、傳ふるに便ならず。而して修養進取の刺激、亦漸く薄らがるにあらざ。斯の如くんば、いごも床しかりし學園の匂ひも、あせざるなきを保せず。是を以て校友音信の機關たるべき抱負を以て、開校式舉行の吉辰に於て、特にその記念の名義を掲げて、呱呱の聲を擧ぐるこそ、はなりぬ。

其の將來に最も希望を屬せらるゝ、汝會報、願くは親愛なる先輩校友の、深厚なる援護の下に、健全にその成長を遂げ、常に最も忠實ならむことを期せよ。茲に校友を代表し、滿腔の熱誠を以て、汝の前途活動を祝福すること爾り。

本校記事 (會報部理事)

第一 本校の設置

本校の設置は、實に明治四十三年三月阿武郡會に於て、初めて提唱せられたり。その建議の趣旨左の如し。

本會ハ刻下ノ奎運ニ鑑ミ本郡ニ高等女學校ノ必要ヲ認ム右設置ニ關スル調査ヲナシ適當ノ時機ニ於テ本會ニ附議相成リタシ

この年六月、本郡長松浦誠氏新に任に就き、この建議に基づきて、諸種の調査をなし、まづ生徒定員三百人寄宿生七十人を標的とせる創立費約參萬圓、經常費約六千圓を要すべき見込を立てらる。尋いで、萩埭内一町三ヶ村は、經常費通常賦課額の外、特別寄附金として、金壹千圓を支出せむことを協定せり。

かくて、經常費の支途、既に立ちたれども、創立

費の支出、實に容易ならざるものあり。郡長は埭内町村長と謀りて、建設委員を設け、畫策經營の任に當らしめ、その結果として、之を郡會議長瀧口吉良氏に謀り、氏亦大に考ふる所あり、熟議を盡せる後、萩町増山宗史氏と謀り、相携へて上阪し、恰も在阪中なる岡十郎氏の援助を得て、本郡出身にして、當時兵庫縣武庫郡本山村に住せる久原房之助氏の義心に訴ふ。房之助氏その請を母堂文子刀自に致し、懇解其意を盡せしに、文子刀自大にこの舉を嘉し、即ち創立費の全部參萬圓を寄附せむとを約せらる。瀧口氏等歸り來り、郡長及び關係諸氏と會して之を報じ、且之に關し、校舎竣工の上は、(一)校庭に久原文子刀自の頌德碑を建つると、(二)校舎は總へて火災保險に附すると、(三)別に寄附金若干を募集して、不時の用に供し、且校舎保全の資に充つること、等の事協定せられて、茲に全く創立費支途の解決を見るに至りたり。

この時設置に關する調査既に全く成り、殊にその校種を實科となすの適切なるを認め、郡長は明治

四十四年三月開會の阿武郡會に於て之を報じ、且創立費寄附に關する議案一切を同會に附議し、之が賛同を得て、阿武郡立實科高等女學校設置の基礎を確定せり。

本校の位置に關しては、その候補地と見るべきもの多々ありたれども、公爵毛利家所有舊南園御殿は忠正公元昭公の生立ち給ひし地として、その由緒淺からざる處なれば、學校建設上絶好の位置なるべしとて、萩町より公爵毛利家に對し、その土地建物一切の拂下を懇請せしに、公爵毛利家にも特にその擧を嘉して、之を納れられたれば、萩町は又更にその隣接せる宅地を買添へ、その中土地一圓を本校校地となすべく、その全部の使用權を郡に提供せり。

郡は、又その舊南園御殿建物中、表御殿其他二三建物を更に萩町より買入れ、特に表御殿は由緒記念の義を存して、本校生徒精神修養の資に供せしむることせり。

かくて設計既に成り、位置亦定まりたれば、明治四十四年七月七日文部大臣に申請し、同年九月十

二日を以て、明治四十五年四月一日より本校設置の認可を受くるに至れり。

第二 本校の工事

本校は、萩町の東南に方り、市街の紅塵を避けてしかも又市街に遠からざる處に在り。後は、阿武川の下流碧深き橋本川に沿ひて、對岸に畫の如き椿村の山光野色を眺め、前は、宏濶たる萩町の全景を一眸に收めて、阿武の松原の盡る處、指月城山の雄姿、恰も毛利氏三百年の歴史を語らむとするが如きを觀る。而して土地は既に由緒ある南園の舊址にして、滿庭到る處古趣淋漓、大氣亦尤も鮮麗にして、眞に堅實優美なる女子を教養すべき理想地たり。その面積左の如し。

一校地總坪數 三千二百九十二坪

建物敷地 七百三十三坪五合

運動園 六百坪

農園其他 千九百五十八坪五合

新築校舍は、本館及びその附屬建物を第一期工事とし、寄宿舎及びその附屬建物を第二期工事とし

て、明治四十四年十月初めて工を起し、翌大正元年九月十五日全く工を竣ふ。而して主として之が設計監督に任じ、終始この工を董し、は、之がため本郡に聘せる澄川藤藏氏にして、この建築工事を請負ひて、材料その他の提供上遺憾なからしめしは、本郡椿郷東分村堀幸吉氏なりき。

本校建物坪數左の如し。

一新築建坪數	五百九十七坪七合五勺
内	
本館	百九十八坪五合
講堂	七十一坪
普通教室四室	八十坪
廊下其他	四十三坪五合(以上階上)
學校長室	六坪
教員室	十六坪
事務室	八坪
器械標本室	十六坪
理科準備室	八坪
理科教室	二十五坪
裁縫教室三室	六十五坪五合
宿直室	四坪

應接室 四坪

女關廊下其他 四十六坪(以上階下)

本館附渡廊下其他 四十二坪五合

小使室職員便所 十一坪二合五勺

生徒控所 四十七坪五合

生徒便所 十坪

寄宿舎十二室 百五坪

寄宿舎廊下其他 六十五坪五合

寄宿舎生徒便所 六坪

寄宿舎附屬建物 百一十一坪五合

一在來家屋建坪數 百三十五坪七合五勺

内

南園館(舊表御殿) 六十六坪二階四坪

土藏 十五坪

靜養室(病室) 十四坪

教員住宅 二十二坪七合五勺

門衛詰所 十五坪五合

本校創立費の豫算、及び建築費として現に支出せられたる金額左の如し。

一金參萬圓 創立費豫算

金貳万四千參百九拾圓 校舍建築費
 金四千九百七拾五圓 設備費
 金六百參拾五圓 雜費
 一金貳萬五千貳百拾壹圓貳拾六錢
 建築費支出決算高

内
 金貳萬壹千七百參拾圓 校舍新築費
 金壹千貳百七拾壹圓九拾五錢 在來家屋其他買入費
 金貳千貳百九圓參拾壹錢 垣墻改築排水工事費其他
 以上

第三 本校の成立

明治四十五年三月五日、本縣知事の認可を得て、本校學則を設け、修業年限三ヶ年、生徒定員を三百人と定めらる。
 同月三十一日日本縣縣視學米原鶴太本校校長に任せられ其他職員任命せらる。依て本校事務所を阿武郡役所内に設け、翌四月一日より事務を開始す。
 同月九日より三日間生徒入學試験を行ひ、第一學年に壹百人、第二學年に四十五人、第三學年に三

現在職員

學校長	米原 鶴太	明治四十五年三月一日	就任
教諭	中野 貞介	明治四十五年三月一日	就任
兼舎監	豊田 秀枝	明治四十五年三月一日	就任
教諭	松宮 シヲ	明治四十五年四月一日	就任
教諭	高田 テツ	大正二年四月三十日	就任
教諭	河原 夏	大正二年三月三十日	就任
教諭	本永 旭	明治四十五年三月一日	就任
助教諭	竹内新三郎	明治四十五年三月一日	就任
助教諭	世良 ハツ	明治四十五年四月九日	就任
書記	河村 一郎	明治四十五年三月一日	就任
助教諭	河崎 スエ	大正二年三月一日	就任

四

十人の入學を許可し、學級を四學級に編制す。同月廿二日より萩町立明倫尋常高等小學校校舍の一部を借受け、授業を開始す。同日又假寄宿舎を萩町川島村に設く。是に於て、初めて本校の成立を見るに至れり。
 同年六月廿九日、本校第一期の工事略成りたれば、假校舍より本校舎に移轉す。大正元年九月一日に至り、第二期の工事又殆ど成る。是に於て、假寄宿舎を廢して、本校寄宿舎を開く。
 大正二年度は、既定の方針に依り、學級編制を五學級とす。然るに、又時勢の要求に應じ、補習科設置の必要あり。乃ち四月廿六日、更に學則追加の認可を得て、之が設置をなす。依て前年度に比し、二學級を増加することゝなれり。
 本校創立以來、歲月既に一年半、世人の同情を寄與せらるゝもの漸く多く、校運の進展又漸く見るべきものあらむとす。是時に當り、開校式を舉行して、益前途の祝福を期せむとするもの、又聊か微意の存する處なくんばあらざるなり。
 左に本校職員、並に現在生徒數、卒業生狀況を掲ぐ

助教諭	齊藤 タカ	大正二年五月廿一日	就任
囑託員	藤井 二郎	大正二年五月廿一日	就任
學校醫	中村 彌兵	明治四十五年三月一日	就任
舊職員		明治四十五年四月四日	就任
助教諭	松田 ハル	大正二年三月三十日	就任
囑託員	三隅要之助	明治四十五年四月九日	就任
囑託員		大正二年一月	退任

現在生徒數	十五人
補習科	四十五人
第三學年	四十九人
第二學年	四十八人
第一學年	四十七人
第一學年	四十六人
卒業生狀況	大正二年三月第一回卒業生二十八人

内

本校補習科へ入學せしもの	十五人
小學校教員に奉職せしもの	一人
結婚せしもの	一人
家業に従事せるもの	十一人

第四 本校の訓育

本校は、左に掲ぐる教育方針、及び之に胚胎して設けたる學規十二則、生徒心得二十項に基づきて、諸種の訓育を行ふこととせり。

教育方針

- 第一 教育ニ關スル勅語及戊申詔書ノ御趣旨ヲ貫徹スルニ努メ尙訓育ニ關スル本校諸規定ノ實行ニ留意シ我國家及家庭ニ於ケル實地有用ナル女子ヲ養成スルコト
- 第二 特ニ力ヲ精神教育ニ致シ淑徳及常識ノ涵養ニ努メ有用適切ナル技能ヲ具ヘシメ以テ勤勞ヲ樂シムノ美風ヲ大成スルコト
- 第三 質素儉約ヲ旨トシ常ニ空論ヲ避ケ實地作用ヲ獎勵シテ健康ノ増進ヲ計ルコト
- 第四 特ニ禮節ヲ重ンジ言語動作品行ニ注意ス

六

ルコト

第五 職員ハ深ク本校教育ノ方針ヲ體シ和衷協同シテ躬行ノ實ヲ舉ケ以テ師範ノ大任ヲ完ウスルコト

茲に本校に於て、現今實施せる訓育中の主なるものを掲げて、参考に供す。

- 一 忠と孝とは國民道徳の根本義にして、君に對し親に對して報恩感謝の誠を竭すは、家庭に於て、子女訓養の任務を有する主婦の必ず自ら進んで、其範を示すべきものなるを以て、本校に於ては、特に意を斯義に致し、毎朝會集の際、東方遙に 皇居を拜して、常に忠の道念を抱かしめ、又晝食の際は、職員生徒一同食堂に會し、かく暖に衣、豊に食する所以を知らしめ、謝恩の心を喚起して、初めて食に就かしむ。
- 寄宿舎生徒は、父母の膝下を離れて、遠く來り居るものなれば、朝起盥漱の後、舎内に於て遙に父母に對し拜謝の誠意を表せしむ。

- 二 講堂訓話は、毎月一回之を行ひ、學規中の徳目に就き、毎回一題目宛之を訓話し、古例を

引き、偶發事項を用ひ、以て之が實踐の指導をなす。又訓話せる徳目は、その月の心鑑として校内觀易き處に掲げ、常に實踐の標目たらしむ。

三 毛利家歴代の恩徳は、防長士民の永く護るべからざる所、殊に毛利家城治の下に在りて、多年その恩徳に浴せし士民の子孫たるもの、又永く謝恩の心掛なかるべからず。本校は之に關し既に絶好の記念館を有す。故に特に名づくるに南園館の稱を以てし、毛利家に關する訓話は、必ずこの館に於てするのみならず、禮法に茶儀に亦皆この館に於てし、尙進んで、廣く由緒ある記念物を蒐集して、常に生徒の直觀に觸れしめ、益懷恩の念慮を高めしめむとす。

四 寄宿舎は、南園の名に因みて、各舎に名づくるに梅・松・竹・菊・藤・萩などの稱を以てし、各舎にはこの草木を書ける幅を掛け、又その庭前にこの草木を植ゑしめ、以て居常已が住せる舎名に對し、その徳操の發揮に努めしむ。郡會議長瀧口吉良氏、深くこの舉を賛し、各舎に掲げしむべく、今回松林挂月氏筆の畫幅六軸を寄贈せり。

又各舎には、置床を設け、之に花瓶を備へて、四季折々の花を入れしめ、又以て他日家庭の主婦として、高雅なる趣味の養成に資せしめむとす。

五 生徒をして勞働の習慣に馴れしむるは、學規の定むる所なり。故に本校は、建築工事竣成以來、農園の施設に着手し、今や既設の蔬菜園六百坪を有す。而して之を生徒各自に分配して、播種・施肥・栽培等に當らしめ、かくして穫たる生産物は、亦生徒に分配して、家庭に持歸らしめ、或は家事科割烹の材料に充て、又或は多少の廉價を以て、寄宿舎の需用に供し、その収益は、之を生徒に配當するが如く、専ら勤勞の趣味を養はむとす。この外花卉園・果樹園・桑園・茶園・桐園・教材園・莓園・水草園・葡萄園・藤棚・竹林等又皆共同作業に依り、或は既にその施設を了へ、或は未だその施設に至らざるものあれども、今や生徒のこの事業に對する趣味尤も深く、皆自ら進んで、この作業に服する傾向隆なれば、之が全部の完了を見むこと、亦決して遠きにあらざるべし。

七

本會記事 (會報部)

第一 本會の成立

本會は、左の如きいとも大なる目的を以て、組織せられぬ。

本會ハ職員生徒及卒業生ヲ以テ組織シ相互ノ親睦及修養ヲ圖リ善良ナル校風ノ大成ヲ助クルヲ以テ目的トス (會則第一條)

明治四十五年五月廿八日、國母陛下御誕辰の佳節を卜して、發會式を指月公園に擧げ、南園御殿の御名に因みて、南園會と稱せらる。その時會則の協議ありて、米原校長を會長に推選し、副會長理事皆會則に依りて、先生方之に當らるゝことなりたれば、これにて、本會の組織初めて成りぬ。同年六月十五日、久原文子刀自の一行、本校に臨まれ、その際、本會への土産として、金五百圓の寄贈あり、その月廿一日、久原家の親族齋藤幾太田村市郎の方々より、本會の基金として、又金五

百圓を寄贈せらる。會員一同は深くその芳志を感謝しぬ。

同月廿六日、臨時總會を開き、會則改正の協議あり。之に依りて、久原文子刀自を特別名譽會員に久原房之助・久原清子・齊藤幾太・田村市郎・松浦誠・瀧口吉良の方々を名譽會員に推薦し、同時に松浦名譽會員を、更に顧問に推薦すること、なり、夫々推薦狀を贈呈せられぬ。この時又基金管理規程を設けられき。

本會は、いとも忘れがたき、明治昭代の記念機關として、文庫を附設せむとの企あり。大正元年十二月三日萩町小原彌一郎氏、之が施設費として、金五拾圓を寄贈せらる。一同深くその芳志を感謝しぬ。その月廿四日、本會附設明治記念文庫規程を設けられ、その時準備既に成りて、直に文庫を開始せられき。

大正二年六月三日、松浦本會顧問、玖珂郡長に轉任のため、その任を辭せられたれば、その月九日本郡長として、來任せられたる横俊治氏を本會名譽會員に推薦し、又更に本會顧問に推薦すること

なり、その月廿一日之が推薦狀を贈呈せられぬ。同年八月十二日、萩町堀田久子刀自、金貳拾五圓寄贈の申出であり。本會にては之を附設陳列所の設備費に充つることとなり、間もなく準備了りて、陳列所を開始せらる。一同は深く刀自の芳志を感謝しぬ。

その他金品を寄贈して、本會事業の經營に對し、援助を與へらるゝもの尠からず、一同の尤も欣幸とする處なり。就中某夫人の如き、特に匿名を以て、吾等の事業を資けらるゝさへあり、一同は深く夫人の床しき心盡しに感謝を表しぬ。

第二 本會の事業

本會には、會則に示さるゝ處、學藝部・運動部・會報部等、皆夫々の事業あり。又年中行事としては學藝會・運動會・演藝會等開催の規定あれども、未だ多くの事業行はれざりしは、時恰も諒闇中に在りて、御遠慮申上ぐべき必要ありしと、本校創立後施設の事業多かりしたため、機會を得らるゝこと難かりしとに由りてなり。しかも猶、(一)

附設の事業として、文庫・陳列所・娛樂場を開き、又養鶏場・養蜂場を設けて、之が飼養を始めしと、(二)本會創立以來、會員の死亡せるもの四人、その都度、會長理事の方々を始め會員總代その葬儀に參し、香花を手向けて、亡き友の靈を吊ひしと、(三)第一回保證人會を始め、郡會議員の參觀、知事一行の臨校、毛利男爵の來臨、その他因縁ある方々の來觀の際などに於て、自ら培ひし畑の物や、手作りに成りし調理の物を供して、之が笑味を戴きしと、(四)卒業せられし姉上方の送別會や、新に入會せられし方々の歡迎會を始めとし、度々の茶話會開催ありて、尠ならず友情を温めしこと、等は本會事業の一部に過ぎざれども、本會の眞心を盡したる点に於て、また會員一同の、竊に自ら満足せる所なりき。而して規定の事業も、既に第一回學藝會を開き、今又開校記念として、會報第壹號を發行するの運に至れり、今や、本會の事業既に緒に就きぬ。是よりは益奮つて、本會目的の達成に努めむかな。

第三 本會の經濟

本會は、既に壹千圓の基金を有せり。故に經濟の基礎又略確定しぬ。

會員及び會費に關しては、會則中に左の規定あり。

職員ハ特別會員トシテ毎月金拾錢生徒ハ校内會員トシテ金參錢ヲ納付シ卒業生ハ校外會員トシテ卒業ノ際一時若クハ卒業後五年間ニ於テ若干ノ金員ヲ納付スルモノトス（會則第三條第五條）

經常費は、毎月収入の會費と、基金より生ずる利子とにて、支辨することゝなり居れども、大正元年度は、その豫算中に、基金より生ずる利子を入るゝの運に至らざりしたため、同年度の經常費は、會費のみにて支辨せられき。

本年四月總集會に於て、報告せられたる大正元年度の經常費決算額を左に掲ぐ。

収入の部
一金五拾圓六錢 會費
支出の部

一金五圓五拾錢 神社其他へ獻進料
一金四圓拾七錢 會員並に他校生徒へ贈遺料
一金貳圓 會員吊慰料
一金貳拾七圓五拾五錢參厘 雜費
計金參拾九圓貳拾貳錢參厘
差引殘金拾七圓八拾參錢七厘

大正二年度へ繰入

以上

開け行く道に出ても心せよ
つまづくことのある世なりけり
たちちれの庭の教は狭けれご
廣き世に立つ基とはなれ
大空にそびえて見ゆる高嶺にも
のぼればのぼる道はありけり
あまたりにくほみし軒の石見ても
難き業とて思ひすてめや

本會の會員

本會の會員

現在の會員

校内會員 (年齢順・現住所)

(補習科)

松本 早知 萩町東田町
 宮本 カツ 全南片河
 山本 政子 全平安古
 山本 幸 全濱崎新丁
 中島 スエ 全御許町
 田中 冬子 椿村金谷
 齋藤ミドリ 萩町樽屋丁寄泊
 久保田ミサコ 椿郷東分村香川津
 村田 ミツ 全前小畑
 佐々木フジコ 三見村
 藤田 サト 本校寄宿舎
 河上 チヨ 萩町橋本
 野上 サダ 全土原
 金子タマヨ 本校寄宿舎

倉田 静子 萩町西田町

(第三學年)

大岩 マサ 萩町南古萩
 松村 しな 全江向
 大崎 レン 全吳服町寄留
 國司 シツエ 本校寄宿舎
 阿部 ミサ 萩町今古萩
 多田 マツ 椿郷東分村椎原
 上田 トミ 萩町河添
 中村喜與子 全東田町
 草刈 フジ 全河添
 上田 信子 全北片河寄泊
 神代 君子 全河添
 大賀 チヨ 全鹽屋町
 三宅 節 椿村雜式丁
 森重 アキ 本校寄宿舎
 原 チヨ 萩町土原
 難波 ハツヨ 全米屋町
 島田 壽美 椿村雜式丁

伊藤 霜 萩町堀内

堀 千代 全江向
 上田 正子 椿村沖原
 小野 恭 本校寄宿舎
 長見 キシコ 萩町鹽屋丁寄留
 中原 ユキ 椿郷東分村沼田ヶ原
 安達 ハナ 全上野
 藤本 ミヨコ 萩町御許町
 原 キク 全平安古
 中原 千代 全橋本
 今地 イシ 全江向寄泊
 倉重 マサコ 椿郷東分村椎原
 松村 きく 萩町江向
 岡 タカ 本校寄宿舎
 伊藤 於松 全
 宮本 タカ 萩町東田町
 河野 幸 本校寄宿舎
 山下 カメ 山田村倉江
 河村タミ子 本校寄宿舎
 三宅美智子 萩町江向

澄田 ハツ 萩町北片河
 神村 ヨシ 全米屋町
 阿部 スマ 全北片河
 岡部 シゲヨ 本校寄宿舎
 山根 英子 萩町河添
 三好 貞子 全熊谷丁
 末成 豊子 全平安古
 大中 テイ 全川島
 (第二學年一の組)
 阿部 タケヨ 本校寄宿舎
 箭島 愛子 全
 田中 順子 萩町西田町
 河北 由子 全平安古
 河野 ミツコ 全今古萩
 大森 チヨ 全濱崎
 椿 嘉子 椿郷東分村椎原
 西山 ヨシ 萩町川島
 君谷 喜與子 本校寄宿舎
 田中 ツルヨ 全
 田村 操 椿村沖原

齋藤 マス 萩町樽屋丁寄泊
 秋枝 アヤコ 全土原寄泊
 長井 フミ 全橋本寄泊
 山中 幸子 全橋本
 倉増 千代子 本校寄宿舎
 齋藤 キク 椿村大谷
 黒瀬 キミコ 萩町江向
 三村 クリ 椿村沖原
 中原 トラ 萩町土原
 齋藤 シナ 本校寄宿舎
 重枝 フキ 萩町橋本
 松原 ツル 全瓦町
 大田 ヨシ 全土原
 村木 秀子 全堀内
 内藤 ヨシコ 全江向
 河野 千世 全土原
 片山 ヨシ 椿郷東分村中の倉
 長嶺 芳子 萩町平安古寄泊
 平木 ハナ 全河添
 三浦 ヨシ 全江向

阿座上 サダコ 椿村金谷寄泊
 石井 千代子 萩町東田町
 野村 フシ 全米屋町
 榎原 マサミ 全堀内
 堀永 フクコ 全東田町
 伊藤 ミサヲ 全江向
 松屋 チヨ 全濱崎
 阿部 チヨ 全今古萩
 松井 文子 全川島
 溝部 ハル 椿郷東分村松本上市
 大賀 政 萩町塩屋町
 宮原 ヒサ 全平安古
 米原 ハツメ 全江向
 堀江 ミドリ 全
 村田 須惠 全
 遠藤 トキ 全橋本
 佐伯 千代子 本校寄宿舎
 和田 秀子 萩町河添

(第二學年一の組)

粟屋 雪 萩町江向
 山本 ウメコ 全濱崎
 藤村 マツ 全江向寄留
 松野 花子 全土原
 三浦 チセ 全濱崎新丁
 山下 シナ 山田村山田
 村上 ミチ 萩町東田町
 三上 チエ子 山田村奥玉江
 國弘 トメ 萩町川島
 林 清子 全平安古
 吉田 壽美 全川島
 田中 フミコ 椿郷東分村香川津
 厚東 佐世 全前小畑
 南方 京 全中小畑
 山本 サチコ 椿村大谷
 伊藤 フサ 全
 河田 シズ 萩町土原寄留
 阿武 カメ 全川島
 山下 サト 椿郷東分村前小畑

吉賀 トシ 萩町濱崎
 塩見 菊代 椿村椿
 大山 スミ 全木部
 江川 三重子 萩町河添
 能美 満壽子 椿村雜式丁
 馬屋 原孝子 本校寄宿舎
 金子 シヅ 萩町平安古
 村田 テツ 全江向
 三好 嘉子 全濱崎新丁
 井上 マツヨ 本校寄宿舎
 岩竹 ハナエ 萩町平安古
 金子 トミ 全濱崎
 長谷 チヨ 全津守丁
 古橋 喜代 全川島
 金子 清 本校寄宿舎
 松岡 シヅコ 椿郷東分村中小畑
 寺田 クリ 全前小畑
 岡村 シゲコ 萩町平安古
 山本 松江 全江向
 三村 キク 椿郷東分村上野

(第一學年一の組)

小野 フミコ 本校寄宿舎
 竹重 春 萩町橋本
 安田 ヨシ 本校寄宿舎
 鈴木 壽子 萩町西田町
 光田 コト 全熊谷丁
 渡邊 保子 全平安古
 國重 静子 椿郷東分村上野
 河村 豊子 萩町橋本
 阿武 文子 全土原寄泊
 (第一學年一の組)
 吉武 静 本校寄宿舎
 浮里 ミヨコ 山田村奥玉江寄泊
 増野 クリ子 萩町濱崎
 山根 豊子 本校寄宿舎
 藤原 久枝 椿郷東分村中の倉
 柳井 マタコ 山田村倉江
 北村 光子 萩町江向
 能美 キクコ 全唐樋
 世良 菊野 椿村濁淵
 間 菊枝 本校寄宿舎

都築ユキコ 本校寄宿舎
 横山 ツル 萩町河添
 井町 スミ 三見村
 江山タキコ 椿村雜式丁
 田原 秀子 山田村奥玉江
 福壽 キミ 萩町吳服町
 河村 ウメヨ 全土原
 河村 ミト 全
 伊佐 喜美 萩橋本
 久保田 ヒデ 椿郷東分村香川津
 下間 静子 萩町吉田丁
 高壽 ヨシコ 山田村玉江浦
 井上富美子 萩町江向
 石光 茂子 全下五間町
 小野 重 全東濱崎
 吉村 キク 椿郷東分村中の倉
 安田 高子 萩町河添
 末武 満子 本校寄宿舎
 堀 君代 萩町江向
 山本チヨコ 全平安古

國司 八重 椿郷東分村鶴江
 宗樂 シゲヨ 萩町橋本
 高橋 タカ子 全御許町
 植村 雪子 椿郷東分村鶴江
 阿武 ミユキ 全香川津
 花村 秀子 萩町堀内
 原 末 全町平安古
 吉岡 タケヨ 全土原寄泊
 白根 光子 全濱崎
 今地 マツ 全江向寄泊
 吉田 ヨシコ 全濱崎
 小笠原 マス 全河添
 野村 文子 全御許町
 渡邊 八百 全江向
 植村 操 椿郷東分村香川津
 重枝 トラコ 萩町橋本
 齋藤 テル子 全濱崎
 (第一學年二の組)
 植村 君子 椿郷東分村鶴江
 大田 タチ 萩町津守丁

原田 ヒサ 山田村玉江浦
 高木 梅代 萩町濱崎
 林 ウタコ 椿郷東分村中小畑
 井本 龜子 本校寄宿舎
 前田 トミコ 全
 中隈 チヨ 萩町川島寄留
 佐々木 フサ 本校寄宿舎
 吉山 アキコ 山田村倉江
 長谷川 トシヨ 本校寄宿舎
 野村 マツ 山田村奥玉江寄泊
 中村 絹子 萩町川島
 前原 マサ 山田村山田
 中村 ヨシ 萩町川島
 石光 園子 全平安古寄泊
 村田 千代 山田村玉江浦
 岩田 豊子 全奥玉江
 原川 壽子 萩町土原
 長見 マサコ 全塩屋町寄留
 清水 ヨシ 全惠美須丁
 藤原 ふじの 全平安古寄留

竹内 文子 萩町平安古寄留
 堀 綾子 全上五間町
 中村 ノブ 全江向
 惠美須屋ユキ 山田村玉江浦
 齋藤 ヤスコ 椿村大谷
 玉井 芳江 萩町江向
 藤山 ユクセ 本校寄宿舎
 難波 アキ子 萩町米屋丁
 原 ウキコ 全東濱崎
 原 クニヨ 本校寄宿舎
 村上 マス 萩町東田町
 石川 文子 椿郷東分村中の倉
 横 雪子 萩町土原
 岡本 ミチ 全吉田丁
 堀 壽子 全河添
 山下 マス 全平安古寄泊
 石井 壽萬 全土原
 上田 ツル 全御許町
 阿武 春枝 全濱崎
 中原 俊子 全橋本

後藤 アサ 萩町今古萩
 山中 照子 全橋本
 河村 千代 全西田町
 藤井 良子 同米屋丁

校外會員

(年齢順・現住所)

(第一回卒業生)

松野 ユキ 萩町土原
 伊藤 コウ 全
 綿貫 トキ 大津郡瀬戸崎村
 倉田 チヨ 萩町今魚棚
 津田 エン 全東田町
 竹内 ミツ 全惠美須丁
 高垣 清子 全古萩
 小澤 歌子 椿村沖原
 田邊 ハル 德佐村
 金子 ハツ 大井村

藤井 キク 德佐村
 平田 トシコ 萩町熊谷丁
 金子 桃代 椿郷東分村香川津

* * * * *

* * * * *

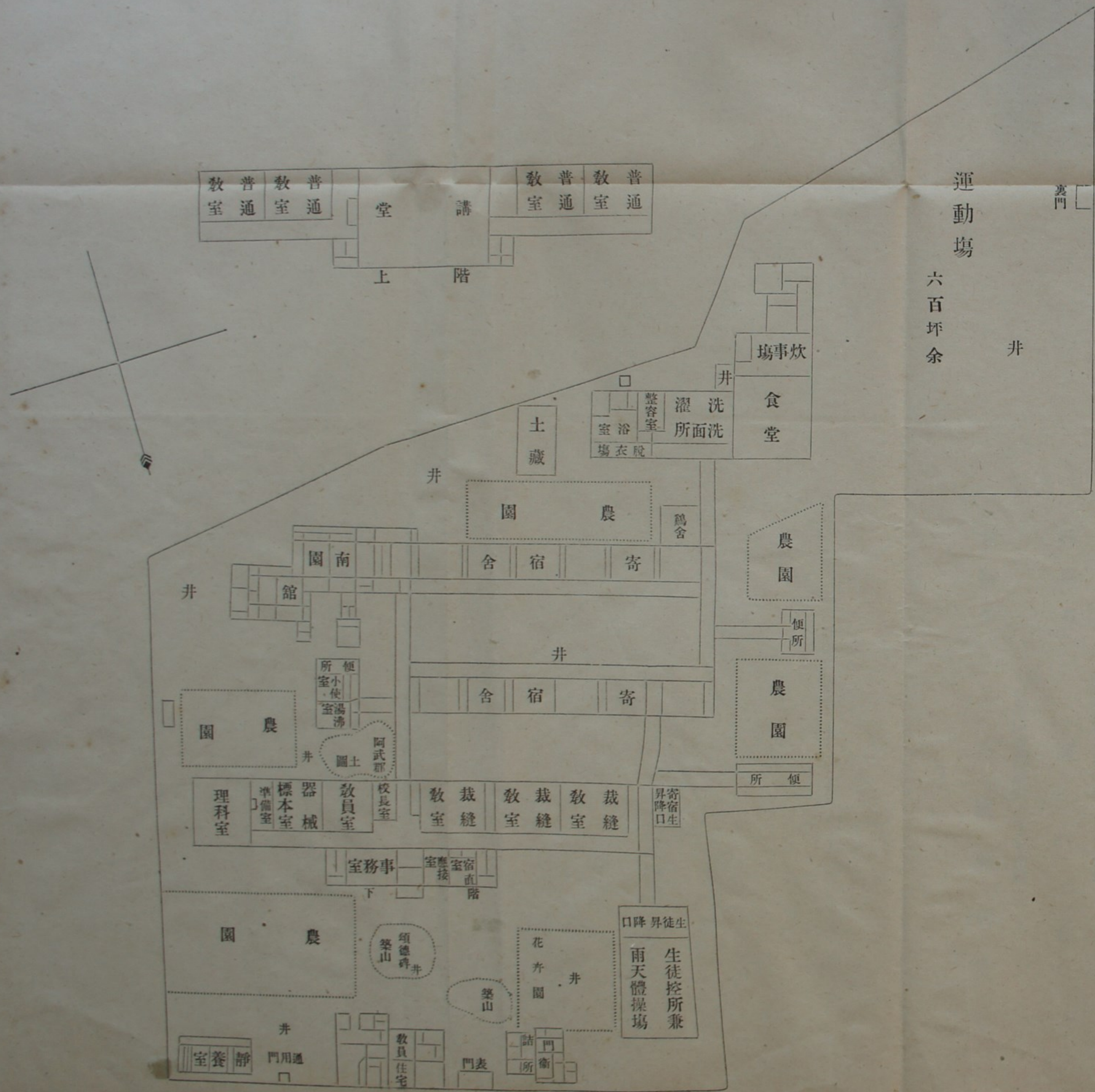
* * * * *

* * * * *

* * * * *

本校敷地圖

(縮尺六百分ノ一)



學規

- 一、教育に關する 勅語の御趣旨を奉體し深く忠孝の大道を辨へ前賢古哲の事蹟に鑒み躬行實踐の人たるべきこと
 - 二、學問の要は品性の修養に在り徳を修め智を磨き専心業を勵み日夕自己の性格行爲を省みて進徳向上に努むべきこと
 - 三、常に思想を高潔にし常識を具へ忍耐從順敬愛を以て良妻賢母良姑良主婦たるの婦徳を養ふべきこと
 - 四、良心の指揮に従ひ父母教師の教訓を確守し特に品行を正しくし誠實謹直の人たるべきこと
 - 五、禮讓公徳を重んじ言語動作容儀を慎み温良貞淑着實の人たるべきこと
 - 六、報恩感謝の情操を養ひ祖先長上先輩に恭敬を盡し又常に友愛親切にして和平の人たるべきこと
 - 七、廉耻を尚び節操を持し常に周匝緻密の思慮を以て事に當り陰險自負多辨の如きは最も自らこれを戒め苟も輕佻浮薄に流れざること
 - 八、規律を守り整頓に心掛け嚴正閑雅整齊同情寛恕の人たるべきこと
 - 九、質素儉約にして勞動の習慣に馴れ華を去り實に就き事毎に己を盡し常に勤勉を樂しむべきこと
 - 十、常に慎重の態度を以て嗜欲の節制に努め漫に世の流行を追ひ又は其風潮に動かされざること
 - 十一、學友には骨肉の情誼を以て親交扶掖し又人に接するに天空海淵の量を以てし人の美を濟すに意を用ひ仁愛信義を尚び難事に自ら當りて安易を人に譲り苟も他人の非を擧げ儕輩を凌ぐが如き言行これあるまじきこと
 - 十二、身體の健康鍛練に留意し快活の氣を以て常に運動を勉め決して陰鬱に陥るが如き風これあるべからざること
- 右の條々基く所は至誠なりよく辨へおかるべき事

大正二年十月三十一日印刷
大正二年十一月三日發行

(非賣品)

編輯所

山口縣阿武郡立實科高等女學校

南園會々報部

發行者

右代表者

竹內新三郎

印刷者

山口縣阿武郡萩町大字東田町二二六二番

河村春次

印刷所

山口縣阿武郡萩町大字東田町二二六二番

萩國華新聞社

南
國
會



山東縣阿孫立書林高第...